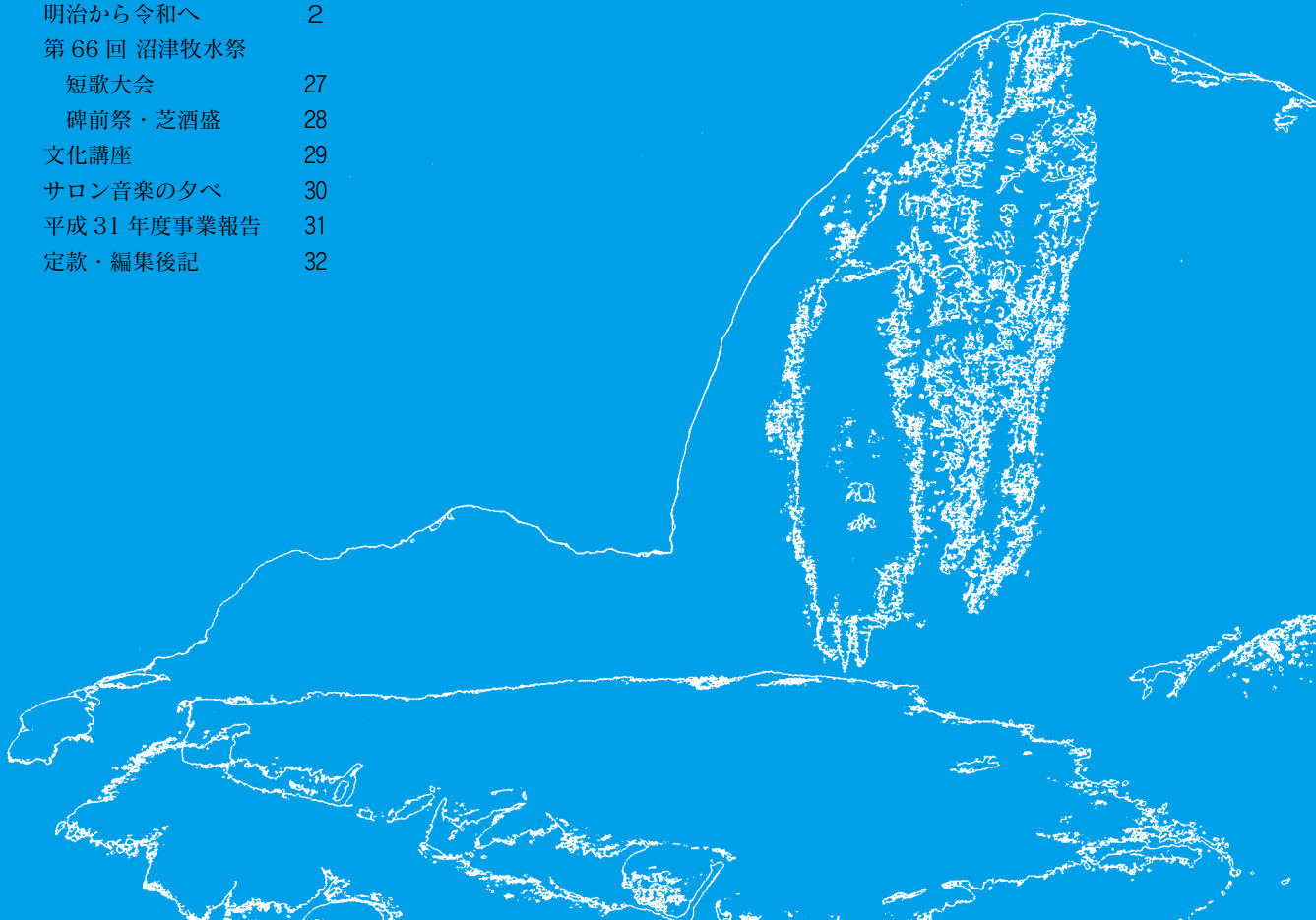
桜山河

第33号

令和２年５月15日
発　行
公益社団法人沼津牧水会

目　次

明治から令和へ　2
第 66 回 沼津牧水祭
　短歌大会　27
　碑前祭・芝酒盛　28
文化講座　29
サロン音楽の夕べ　30
平成 31 年度事業報告　31
定款・編集後記　32



明治から令和へ
―五代をみつめた『創作』

沼津市若山牧水記念館館長
榎本篁子

牧水を中心として明治四十三年創刊された短歌誌『創作』が昨年百六巻を迎えたが、牧水没後九十一年の令和元年九月十七日発行の九月号をもって終刊の運びとなった。

通算百九年にも亘り我が国の詩歌文藝誌の中に存在してきた歴史の重さは、平成二十五年『創作百巻記念号』の編集を終えた時に

生命の影重きを載せて一世紀「創作」百巻畏みて編む　　榎本篁子

と歌に詠んだが（＊牧水が言うに「歌は生命の影である」とのこと）、先達並びに現社友に対しての畏敬の念は六年を経て更に深く、この度諸般の事情でやむなく終刊せざるを得ない力不足に恥じ入るばかりである。

『創作』百六巻といえば百十年にも及ぶ「時」を記録した資料であり、関わってきた牧水関係者にとっては身近な生きた歴史書といえる。

『創作』の創刊の頃の世相はといえば、日露戦争が五年前に終結し、日韓併合がなされ、明治から大正へ移行するという時代であった。

そのような大変な変化の時代は若者のエネルギーも出口を求めていたためか、あふれである情熱が一点に集中したような意気に満ち満ちた『創作』の発刊であった。そこには尾上柴舟、太田水穂、窪田空穂、與謝野寛、前田夕暮、土岐善麿、北原白秋、石川啄木、相馬御風、川路柳紅、四賀光子、今井邦子、中川一政、表紙画には高村光太郎、茨木猪之吉（日本のセガンティーニといわれた山岳画家・牧水友人）等々、後の日本文壇、画壇を背負った人々が名を連ねている。

佐佐木信綱発行の『心の花』を筆頭に『水甕』『創作』と短歌誌発刊の揺籃期ならではの豪華さである。

大正に入ってからは揺籃期に登場した歌人にとっての次のステップへの移行、その趣旨に沿っての動きとも重なり其々の道に分かれていったのも必然であった。その意味でも詩歌文学に対する牧水の情熱が、その創成期に『創作』を発刊した意義は大きかったといえよう。

以上成り立ちから現在までの『創作』の概要を記したが、その根底にあるのは牧水の歌に対する思いである。

「歌」に対して理解なく、「自己」に対して理解を持たぬからである。とにかく、もう少しどうにかしませう。もう少し本気になつて歌をやつた所で、決して諸君の損にはならない。これだけは事実だ。何も「歌」のためや「歌壇」のためや、「歌の雑誌」のためや、地位名望乃至歴史的の欲求から云ふのでない、まことに「その人一生」のために云ふのである。墳墓に入る際、せめてもの心やりのために云ふのである。

（『創作』第七巻第七号　大正八年八月）

牧水は『創作』はその人のための『創作』であり、何より社友ひとりひとりを心にかけ、真剣に語りかけていた。社中は何ともいえない温かさがあったという。その牧水の心のもとに本当に数多くの先達が幾度もの危機がありながら次の代を育て、そして又を繰り返してきた尊い結晶の百六巻なのである。

今こうして『創作』百六巻九月号を手にする時、明治、大正、昭和、平成、令和の百九年という一世紀余に亘る、大きな時の流れの中に共に在った多くのお心のおかげを思う。その上、沼津牧水会はじめ全国の牧水顕彰会の方々が「牧水次の時代」を照らす希望となってくださっていることを心より有難く感謝申し上げつつ、『創作』百巻記念号並びに終刊記念号を中心に記してゆきたい。

『創作』令和元年９月
終刊記念号

先ず、若山牧水記念文学館館長伊藤一彦先生には、「不死鳥の牧水と『創作』」と題し、温かい御挨拶を賜り、終刊号の巻頭を飾っていただいた。有難く深謝申し上げ、ここに全文を紹介させていただく。

◇

若山牧水の声が聞こえる

我が孫たちよ。本当によくやってくれた。妻の喜志子のあとを、息子の旅人が受け継ぎ、そして孫の聚一と篁子が中心になって、「創作」を第百六巻まで刊行してくれたことに心から御礼を言いたい。ありがとう。

「創作」は平成三十一年三月号で終刊し、この九月号が終刊記念号である。百年以上にわたる「創作」が詩歌壇に果たした役割はまことに大きなものがある。

明治四十三年の創刊号の編集後記にあたる「記者通信」に「今この『創作』の出るに当り自ら一種厳粛な歓喜の情を抑ゆるを得ない。我等のこの事業が詩歌壇のために何等かの意味ある働きをなし得たならば、我等は深く満足する」と書かれているが、牧水筆と思われるこの文章が予測し期待したとおりに十分に「意味ある働き」を成し遂げたのである。

「創作」の歴史をたどるには「創作」百巻記念号（平成二十五年九月発行）に掲載の「略年譜」が便利である。危機は幾度かあった。最大の危機は牧水が世を去った昭和三年だった。しかし、妻の喜志子が見事な主宰者となり、大悟法利雄と共にその危機を乗り越えた。

昭和の初めと言えば、社会も文学も激動の時代であり、短歌も例外ではなかったが、喜志子は牧水の歌風と歌論をいかに継承発展させるかに腐心した。そのために取った一つの方法が「創作」の扉に牧水の歌論や作品、また自歌自釈を載せることだった。そのことをあらためて教えてくれたのは東京の田畑書店の大槻慎二氏である。今年の五月、大槻氏から手紙を戴いた。それは大槻氏が牧水に関心を持ち、「創作」のバックナンバーを見ていたら、扉の裏の牧水の歌論や自歌自釈が興味深く、これらをまとめて本にしたいという内容だった。そして、昭和七年から十六年までの掲載分がコピーして同封してあった。解説を依頼されて喜んで引き受けたのだが、コピーを読みながら歌論集や牧水作品からの抜粋の確かさにさすが喜志子夫人だと思った。大槻氏は短歌を作らない人にも学ぶところがあると考えたという。没後九十年を超えて人々の心をとらえる牧水の魅力を語るエピソードとして記した（その本は『エッセンシャル牧水―妻が選んだベスト・オブ牧水』として田畑書店から近く出版される予定である。）大槻氏のような編集者や読者はこれからも現れるのではないか。そういう意味では没後も牧水は生き続けているし、「創作」も終刊後も生き続ける。

「創作」の第二の危機は平成十七年十二月の若山とみ子主宰による突然の廃刊だった。だが、若山聚一氏、榎本篁子氏によってその翌年「創作」は復刊された。

それは並々ならぬ覚悟と尽力によってだった。「創作」の今年一月号の若山聚一氏の「新春随想」「川越便り」を読み返しながら胸があつくなる。聚一氏は、父親が建築設計事務所をたたんで喜志子逝去後「創作」を引き受け悪戦苦闘している姿を見て、歌壇にはどんなことがあっても近づくまいと考えていたそうである。しかし、聚一氏は主宰を引き受け、篁子氏と協力して「創作」を刊行し続けた。

「結論から申しますと、私は『創作』の刊行を引き受けて今は本当に良かった、と思っております！それは何故かと申しますと『創作』を担当してから知り合った『創作』の社友の方達は本当に素晴らしい方達だったからでした。」と書いている。生前の若山旅人氏と私がお話

する機会があったときに、旅人氏が「私は日本一の親孝行者ですよ」と微笑しながら言われたのを覚えている。牧水家の子孫はみな志をしっかり受け継いだ「親孝行者」である。

「百巻記念号」は特に労作である。四百ページを超える大冊であり、岡野弘彦氏、佐佐木幸綱氏のエッセイを初めとする寄稿文、過去の『創作』からの貴重な抜粋資料などを収めている。そして百巻を超えて百六巻まで引き継いだ。

牧水を郷里の偉人として尊敬する宮崎県では顕彰活動をこれまで行ってきた。

「若山牧水賞」（宮崎県・宮崎日日新聞社・日向市・延岡市の主催）はその代表的なものである。今年で第二十三回を迎え、全国から注目される短歌賞になっている。それは何よりも受賞者が実力ある歌人であり、そして受賞後により一層の活躍をしているからである。

選考委員の慧眼によるものである。

また、毎年の選考委員ならびに受賞者の牧水の短歌と人生についての講演は、県の内外に牧水の価値をさらに知らしめるものとなってきたと思う。

宮崎県は来年の秋に国民文化祭を開催することになっている。神楽や国際音楽祭などと並んで牧水もメインイベントのテーマに決まっており、牧水の「短歌オペラ」を上演することになっている。

昨年日向市や東京都で上演した舞台の完成版と言っていい。牧水が宮崎を歌った作品が第三部として書き加えられる。

牧水の誕生地の日向市では、命日に牧水祭をずっと行ってきた。それとは別に短歌大会も開いているが、今年九回目を迎える「牧水・短歌甲子園」は全国から多数の出場応募があって年々盛会である。坪谷の若山牧水記念文学館もさまざまの企画に取り組んでいる。また、牧水が十代を過ごした延岡市は伝統の歌碑祭を長く行うと共に、全国から多数の応募がある「若山牧水青春短歌大賞」で牧水を全国に発信している。宮崎県の取り組みを記したが、沼津市や群馬県みなかみ町なども特筆すべき牧水顕彰の目覚ましい活動をしている。牧水没後も「牧水」は不死鳥のごとく羽ばたいている。

「創作」が終刊を迎えても、「創作」は不滅の価値を更に持ち続ける筈である。

私はそう確信している。

◇次に、『創作』百巻記念号の編集の意図を知っていただきたく、『創作百巻記念号』から、「目次」及び「編集に当たって」と「詩歌時代について」の全文を紹介させていただくことを了承されたい。

「創作」第百巻記念号　目次

口絵写真

「創作」創刊百巻記念を迎えて……若山　聚一…1

「創作」発刊に就いて……若山　牧水…2

第一章　特別寄稿

牧水短歌の不思議―熱きしらべの力―……岡野　弘彦…5

牧水のこと・「創作」のこと

……「心の花」主宰・早稲田大学名誉教授　佐佐木幸綱…10

「創作」と牧水……若山牧水記念文学館館長　伊藤　一彦…12

なぜ牧水なのか？……書　家　榎倉　香邨…16

牧水と喜志子……短歌誌「樹林」主宰　大坂　泰…19

「創作」百巻記念号発刊に寄せて……日向市長　黒木　健二…24

「創作」百巻記念号発刊に寄せて……延岡市長　首藤　正治…25

牧水と沼津がつなぐもの……沼津市長　栗原　裕康…27

ふるさとの牧水だより

……日向市東郷町若山牧水顕彰会会長　小林　理教…28

牧水のふるさと……延岡市若山牧水顕彰会会長　塩月　眞…30

「創作」百巻を祝す……公益社団法人沼津牧水会理事長　林　茂樹…32

名歌「幾山河」誕生の地・哲西町

……哲西町牧水顕彰会会長　水地　秀寿…34

牧水に酔う……東京牧水会会長　田原　大三…36

思い出すままに……短歌誌「朝霧」主宰　山村　泰彦…39

「わか」あての喜志子の手紙

「創作」との出会い……短歌誌「彩雲」主宰　田中　伸治…43

「創作」と春郊……平賀　徹…45

「創作」六十周年社友全国大会の盛会に学ぶ

……日向市若山牧水記念文学館（前）事務局長　那須　文美…47

「創作」創刊百巻を祝して……前延岡図書館館長　九鬼　勉…51

牧水と両親……大悟法雄作…53

香貫山考「牧水と玉城徹」……三宅　勇介…56

第二章　百巻記念特集

創刊号・第二巻一号他・特集……60

「創作」と牧水……大悟法利雄…80

創作社の歌風とその進展……高橋　希人…93

若山牧水概論……大坂　泰…97

初期又晩期……竹中　皆二…101

『富士百首』について……桜井　淑…105

牧水先生と佐久……井出一太郎…111

初期〝創作〟を語る……中川　一政…114

我が師・牧水と一政……遠藤　典太…118

牧水の足跡……杉本　寛一……121
禮山の牧水御夫妻……武田　全……122
思い出あれこれ　―創作七十巻―……久原喜衛門……125
石川啄木君と僕……若山　牧水……128
創作復活号大正二・六年、大正三・十二年創作社全国大会……139
大饗・大火記念号……141
大正十四年社友名簿……152
詩歌時代・牧水追悼号……155
昭和十五年牧水十三回忌全国大会……163
二十一年復刊号　三十一年大会　五十巻　六十巻記念号
没後五十年　七十巻　八十巻　生誕百年　九十巻記念号
新創作・創作全国大会記念号
牧水喜志子の歌鑑賞……176
『海の青』『独り歌へる』『別離』『路上』『死か芸術か』
『みなかみ』『秋風の歌』『砂丘』『朝の歌』『白梅集』
『さびしき樹木』『谿谷集』『くろ土』『山桜の歌』『黒松』
『筑摩野』『眺望以後』
物故社友十首抄……248
私の好きな牧水の歌一首……261
百巻記念社友作品集㈠『朝雲夕雲』より……267

第三章　社内特集

「創作」創刊百巻を祝う……歌代宇多利……282
「創作」歌誌百巻を祝す……梅崎　稜市……283
「創作」百巻に寄せて……福岡　薫……284
「創作」百年の重み……榎本　篁子……285
喜志子先生と老椿・梅……安積　博子……286
若山旅人先生……猪飼　愛子……288
みなかみ紀行の文学空間―法師―……石田　利夫……289
大悟法先生との思い出……伊藤　英一……291
大畑草雨師第一詠草に侍して……古知　匂雨……292
「創作」百巻を祝す……齋藤　雪石……293
師　小作春子……匂坂美佐子……294
「創作」創刊百巻記念号に寄せて……佐藤　フヂ……296
喜志子先生と母・白井敏子……沢之　翠……297
「創作」と人脈……嶋　武志……298
「創作」の思い出……高橋美枝子……300
創作・気仙沼全国大会……伊達　信夫……301
短歌の思い出……田中奈生美……302
創作「社中競詠」……田中　蒼治……303
短歌と共に……永田きみ子……307
比叡と琵琶湖……西木　忠一……308
あさきゆめみし……西田　多門……309
「創作」百巻記念号を迎えて……林　圭子……310
「創作」百巻記念号に寄せて……古谷　義次……313
歌誌「創作」との出会い……三塚　妙子……314
竹中里子先生と私……物江　利子……315
印象深きエジプトの旅……田中ハツセ……315
牧水通り……若松　幸恵……316
「創作」と祖母若山喜志子……若山　三郎……317

百巻記念社友特別作品集㈡

百巻記念社友特別作品集㈡・十首詠……318
牧水・喜志子　私の愛誦歌……382
私の好きな牧水秀歌一首……394
「創作」略年譜……403
石黒清介氏の歌……407
記念号編集に当たって……榎本　篁子……408
記念号編集に当たって……若山　聚一……411

―・―・―・―・―・―・―・―・―

『創作』百巻記念号編集に当たって

「木には二つの命があり、ひとつは樹齢、もうひとつは材として生きるのだ」、宮大工西岡常一氏のことばである。

今年は牧水生誕百二十八年、没後八十五年の年。牧水はわずか四十三年の時間の中でしか存在しなかったがその残したものが多くの人々によって今に生かされている。その一つが「創作」なのである。

一年半に及ぶ「創作」百巻の編集を終えた今、創刊から現在まであらゆる分野の数え切れない程の方々が誌上に登場され、また社友お一人おひとりの短歌作品によって「創作」は牧水没後も絶えることなく百巻を迎えられたことを改めて痛感し頭を垂れるのみである。

その事を覚えて記念号の構想を練る中で、まずは「創作」の基盤である短歌作品を中心に据え、全社友のお歌を十首、特別詠草として募集。それに付随して「創作」そのものへの思い、社友として共に歩んだ人々との思い出等の随想も併せて募り、「創作」の歴史の一頁に刻んでいただくことを第一に。宮崎県日向市東郷町の若山牧水記念文学館、静岡県沼津市若山牧水記念館、並びに全国の牧水顕彰会、宮崎県若山牧水賞等々、元来「創作」とは独立した組織ではあるが牧水を基幹として活動し、それぞれの領域で牧水を支援、顕彰されている。その方々からの御寄稿をいただく事ができたら、を第二として構成し、第一章特別寄稿、第三章社内特集とした。つづいて過去百年の「創作」の歴史を可能な限り幅広く御紹介致したく第二章にまとめた。また限られた紙面の中での情報伝達手段には写真の力が大きいとし、口絵写真にも力を入れ編集を進めていった。今記念号の内容を掲載順に一部であるが紹介する。

◇口絵写真二頁以降は創刊号から平成二十一年一月号九州大会までの「創作」百年の流れを表紙によって呈示した。

『創作』百巻記念号 口絵２頁目

『創作』百巻記念号 口絵１頁目

『創作』百巻記念号 口絵４頁目

『創作』百巻記念号 口絵３頁目

創刊号から第二巻までは今より大判で表紙画は木下茂、十月号と新年号は高村光太郎、牧水友人茨木猪之吉は紙面の都合で割愛したが明治末の斬新なデザイン、色使いには誠に驚く。

第三期「創作」復活号一から四までの表紙は中川一政による。本文にもあるが後の画壇の巨匠中川一政が画を描きはじめてすぐの作。向田邦子の何冊もの装幀で有名な氏であ

『創作』百巻記念号 口絵６頁目

『創作』百巻記念号 口絵５頁目

平成 21 年１月号
創作社 全国大会記念号

『新創作』
平成 18 年４月号

『創作』百巻記念号 口絵７頁目

るが、牧水喜志子の歌集装幀を含め牧水没後も昭和十九年までの十余年「創作」表紙を描き続けて下さった。何と贅沢な事であろうか。

大正十二年社友大会、大震大火記念号、創作社社友名簿、詩歌時代の表紙も美しい。

その後終戦復刊号からのしばらくを除き昭和二十八年から生誕百年記念号までは本文にある画家遠藤典太氏が題字と共に担当、平成十八年創作復刊号から平成二十四年九十九巻までを社友各務孝子氏夫君各務和夫氏が、百巻第一号より小作春子氏令嬢安積博子氏が描いて下さっている。

追悼号以降は折々の記念号によって流れを示した。

「牧水の書」欄一頁目は大正十年頃と最晩年の枯れた筆を。「かるたとり」は牧水の書研究家四位英樹氏所蔵の軸。平成二十四年榎本鑑定の結果、昭和二年新年の作で牧水研究の上で唯一残っていた「家庭人としての牧水像」が表現されているとの伊藤一彦氏の評と共に新発見の歌として全国に報道された作品。

次の榎倉香邨氏の書について。「創作」百巻のために氏にお願いし「星空」「いしたたき」を御提供いただいた。

次頁「目高ごっこ」は社友渡辺孚子氏から文学青年であった父君の蔵書の中にあって表紙も発行所も確認出来ないが牧水が童謡作家の頃のものではないか、と頂戴した。牧水の『小さな鶯』の原本である可能性も高くその頃の雑誌を彷彿させる雰囲気があり、縁どりなど多少修正の上掲載した。

最後に「恋」「戀」を頭に冠した「いざゆかむ」と「木々はみな」の軸。牧水の愛した二人の女性、小枝子と喜志子に対して大正末期の揮毫。明治四十五年喜志子に求婚した直後の歌「木々はみな」に本字の「戀」を書いたところに牧水の意があるとの持論を百巻の記念に公表した。

◇

◇第二章。まず創刊号、第二号、第二巻第一号の一連は原本からそのまま複写し、当時の雰囲気そのものを生かした。特に目次は当時の構成、メンバー等一目瞭然、説明は不要の力がある。編集後記に相当する記者通信は無記名だが大悟法利雄氏によると牧水自身とのこと。社友規約や啄木の『一握の砂』新刊広告も興味深い。第二巻新年号の賀正挨拶は本名が記されている。以上を含めて次の「創作と牧水」で大悟法利雄氏が詳しく解説している。大正十二年牧水「木枯紀行」に同行した高橋希人氏には戦前の主立った社友の解説「創作社の歌風とその進展」を。戦前戦後にわたって「創作」で活躍されこの度何かと御助言いただいた現『樹林』主宰者大坂泰氏に「牧水概論」を。大正十二年牧水に鳳来山で出逢った竹中皆二氏に「初期又晩期」を。「富士百首」の桜井淑氏は沼津時代牧水に大変可愛がられ、喜志子の佳き相談相手であった。晩年藤枝で「あふちの会」を主宰された。「牧水と佐久」の井出一太郎氏は政治家として中央政界で活躍され、また大変な牧水ファン。父旅人が随想で取り上げた「浅間山のけぶり」は井出家所蔵の扁額で両親が井出家を訪問した折みせていただき著したものである。中川一政氏の「創作」の対談は表紙欄と併せて御覧いただきたい。杉本寛一氏は戦前戦後活躍した埼玉の方でこの百巻を手掛ける直前その記録を縁の方が若山家に送って下さったことに不思議を覚える。武田全氏は現「創作」選者仁木理子氏の父君。戦前朝鮮にて師範学校の校長であられ当時様々問題のあった日韓の間にあってその御仁徳で終戦まで地元の人々から慕われ愛されたと伺った。この稿は牧水最晩年の朝鮮旅行の折種々お世話頂いた様子を記された。武田氏は岐阜県で歌人として活躍されていて牧水とは同志の間柄であった。牧水直弟子で亡くなるまでその情熱で選者として社友を育成された久原喜衛門氏の「思い出あれこれ」は七十巻記念に書かれたものである。

◇次から「創作」の記録に入る。この欄の大震大火記念号、社友名簿、詩歌時代は予め頁を用意したが、以降は他の項が全て刷り上がり割り出された頁数の範囲内で記念号特集を纏めることになり、それまで用意していた原稿の取捨選択、記事の割り振り、頁合わせに思いの他時間をとられ娘と難行苦行の調整、内容的にはいささか消化不良の観があるが当初予定していた項目は全て入れる事ができた。

牧水喜志子短歌鑑賞は、牧水の全歌集、喜志子二歌集（紙面の関係上）を入れることと、その評者は今まで誌上で活躍された方に登場していただくべく、その人選を優先、そのための片寄りも生じたと思うがその意をお汲みとりいただき度い。「私の好きな牧水の歌一首」は没後五十年特集を再び取り上げた。「物故者十首」「社友作品集（一）」は今までの社友の作品を残すべく企画。『朝雲夕雲』にない場合は四十八年発行の『流るる水』から抜粋した。

次ページから「社友名簿」と「私の好きな牧水一首」を紹介する。

社友名簿

大正十四年三月

①本　名
②年　齢
③現住所
④出生地
⑤家　族
⑥職　業
⑦履歴の概略
⑧将来の希望
⑨好きなもの
⑩嫌ひなもの
⑪愛讀書
⑫入社年月日

静岡縣

若山　牧水

①若山繁。②四十一歳。③沼津市千本濱、駿河湾に臨み北に富士南に伊豆半島と相對す。④日向國坪谷村。⑤夫婦に子供四人、老母郷里に在り。⑥著述業。⑦明治四十一年早大英文科卒業後四五月新聞記者となり其後雑誌發行と著作とに従ふ。⑧よき歌を詠みよき人となりたし。⑨旅、歌、酒、獨居、團欒、温泉、樹木、野菜（とろゝ汁、香の物など）⑩睡眠不足、混雑喧噪。⑪萬葉集。獨歩集。露西亜の小説等。⑫創刊以来。

若山喜志子

①若山喜志子。②明治廿一年五月生。③沼津市千本濱。④信濃東筑摩郡廣丘村⑤牧水妻。⑥職業有る云へば有り無しと云へば無きが如し。⑦厳格な家庭に成長し意志が固かった為め親の選んだ結婚を嫌ひ二十四歳まで家に居り、どうかして上京したく或る機會に突然上京、太田水穂氏方に三ヶ月御厄介になり、それより獨立生活して見ようと裁縫して五六月暮らす。翌年五月牧水と結婚し今日に至る、⑧夫と同希望、但し我儘をゆるされ度き事。⑨大抵の花類。柄のいい着物、上品な人柄。⑩下品な人。⑪萬葉古義、平易な科學書⑫創刊號から。

大悟法利雄

①大悟法利雄。②二十八歳。③沼津市千本濱創作社。④大分縣

下毛郡大幡村大悟法。⑤故郷に父母及び弟三人（他に嫁ぎたる姉一人）⑥書生。⑦いろいろなことをやってきました。⑧こころよい微笑をうかべながら死にたい。⑨美しくて上品でそして聰明な女、運動競技（主として見る方）澄んだ瞳、賑やかなこと、さびしいこと、食物では肉類水菓子等。⑩醜い下品な女、憐憫の眼を向けられること、人に負けること、不眞面目な戀、不具者の不具な部分を見ること、賑やかなこと、さびしいこと。⑪さて何かしら、⑫大正七年五月（但し二年足らず中止）。

東京府

長谷川銀作

①長谷川銀作。②三十二歳。③市外淀橋町柏木九五六。④静岡市傅馬町。⑤夫婦きり。⑥會社員⑦小學校を終へてより約十年を横濱遊郭金實樓にて成長す。此間東京商業學校を卒へ、一年ばかり新聞雜誌の記者を為し、後同樓の帳場に座る。大正九年現在の會社に入り——其頃牧水氏の依頼を受け約二年創作の経營發行に
を為したる事あり——今日に及ぶ。⑧よりよき生活へ。⑨旅、温泉、酒、歌、讀書、芝居、野球。⑩風の日の物騒がしさ、埃。⑪歌集、文藝評論もの。⑫大正六年十月。

潮　みどり

①長谷川桐子。②二十八歳。③市外淀橋町柏木九五六。④信濃東筑摩郡廣丘村。⑤長谷川銀作の妻。⑥なし。⑦別になし、⑧丈夫になりたし、子供を一人設けたし、静かに暮らしたし。I果實、草花、樹木、雨、青蛙、よしきりの聲、獨りの散歩、歌、静居、讀書。⑩人ごみ、手足のよごれ。蜘蛛。⑪萬葉集、植物鳥虫等に關するもの。⑫大正六年二月

和田　山蘭

①和田直衛。②四十四歳。市外大井町五一六。④青森縣北津輕郡松島村。⑤夫婦の他二女三男。老父母及長男郷里に在り。①教員。⑦明治三十六年青森師範卒業、以来教員生活をなし、大正二年上京今日に及ぶ・⑧宗教的生活。⑨獨居、酒、魚は鱈、野菜は獨活、三つ葉、ほうれんさうなど。⑩喧噪、お手玉、⑪「萬葉集」行成の「和漢朗詠集」「死か藝術か」。⑫創刊直後。

神奈川縣

高橋　希人

①高橋希人。②二十五歳。③横須賀市逸見町（郷里）。④相模國藤澤町。⑤父母及び兄一人妹二人。⑥學生。⑦獨逸協會中學、松本高等學校を経て目下京都帝國大學醫學部にあり。⑧自分の仕事をやり遂げたし。⑨和歌。散策旅行、静居、親睦、果物、茶、動物では、雀。牛。⑩あくどいこと。⑪古事記、萬葉集、良寛詩歌集、長塚節歌集、若山牧水集、くろ土、山櫻の歌、及びゲーテ、ゴットフリード、ケルレル、デーメル、李翰林、王

右丞の作品等。⑫第三期創作發刊以来。

長野縣

中村　柊花

①中村端（はじめ）②三十八歳。③埴科郡東條村。舊眞田十萬石の城下松代町の東方山麓。④同上足輕士族の家に生る。②夫婦に女児一人、昨年一時に両親失ふ。⑥寫業技術者。⑦明治三十九年上田實業學校卒業四十年來松本市大町等に於て縣吏員又は郡技手を俸ずる事十四年間目下郷里に在りて一蠶種會社に通勤し貧しき報酬を食む。⑧人間性の完成と時代を貫く秀歌の創作。⑨旅、歌、酒、女。鶏の臓物、茄子と大根鹽から、うに等。⑩賤しき人間、汁粉、喧噪裡、義理一片の會食會合。⑪芭蕉俳句集、萬葉集、くろ土、桝本卯平の文章等々。⑫創刊二號より。

福井縣

竹中　皆二

①竹中皆二（嘗て雨讀と號す）。②二十四歳。③遠敷郡宮川村加茂。④同前。⑤父母、兄（理一郎）嫂僕弟の六人家内。⑥學生。⑦八高理科中途退學。但し四月復校の見込。⑧健康になりたし。⑨食物では消化よきものなら何でも。⑩不消化物。タバコ、煤烟。⑪詩歌小説類、サナトリアムに関する閲したる本。⑫大正十一年末

福岡縣

久原喜衛門

①久原喜衛門。②二十四歳。③八幡市枝光明十町九軌・宅百號。④佐賀縣杵島郡錦江村。⑤夫婦に子供一人及び弟、祖母に両親郷里に在り。⑥機械労働。⑦大正六年小學卒業後就職。⑧よき歌を詠みよき人になりたし。⑨歌畫、讀書。運動（柔道など）。⑩疲勞、留守番。⑪牧水、啄木、節歌集。⑫大正八年十月

この社友名簿は大正十五年の「創作社全国大会」に合わせて前年の大正十四年三月に全社友に対して用紙を配布し、組まれたもので、御覧頂いた通り、大変愉しい内容になっている。ただ全社友と言ってもこの時にはもう大変多くの社友が入社されており、アンケートには答えなくても名前だけを返送して来たものもあり、それらの社友の名前も全て登録されている。

私の好きな牧水の歌一首（順不同）

中西悟堂

辻々に山のせまりて甲斐のくに
甲府のまちは寂し夏の日

旅の歌、酒の歌、多摩川の歌、白鳥の歌等々、好きな歌は甚だ多いのですが、この一首、牧水さんの草鞋とマントの旅姿にぴったりなので取り上げてみました。心暖まるあの温容忘れ得ません。

山崎青樹

わが庭の竹の林の浅けれど降る
雨見れば春は来にけり

父斌が愛していた歌の一つで、晩年住んだ柿生の家にはこの小碑を建てている。家に書幅があったので私も子供の頃よりなじんでいた歌。牧水のある一面をあらはした名吟と思う。

入江相政

紫に澄みぬる富士はみじか夜の
暁起きに見るべかりけり

学習院の先生の頃、学生の行軍について、滝が原の廠舎に三泊、その時以来の思いです。

安田章生

旅人は海の岸なる山かげのちひ
さき町をいま過ぎるなり

大自然の片隅に人間が作った小さな町を過ぎていく旅人の姿は、なつかしさに満ちている。このなつかしさは、さびしさとも憧れとも通い合って、読者の胸に水のように沁みてくる。

八洲秀章

白珠の歯にしみとほる秋の夜の
酒は静かに飲むべかりけり
歌を愛し旅を愛し酒を愛し人生を愛された牧水先生は、敬慕に堪えない私の大好きな歌人です。その先生の「暮坂峠」と「白珠の…」に附曲させて頂けました事は光栄の至りに存じております。

篠弘

わが髪にまみれて蟻の這ふこと
も林は秋のうらさびしけれ

変貌のはげしかった牧水史のなかで、やはり「死か芸術か」「みなかみ」あたりが傑出している。この一首。髪にまじった蟻を見出した、いい知れぬさびしさの鋭い表現があり、いたく心をうつ。

前川佐美雄

うす紅に葉はいちはやく萌えい
でて咲かむとすなり山桜花

これと同じときの歌、『瀬々走るやまめうぐひのうろくづの美しき春の山ざくら花』もすきです。伊豆湯ケ島温泉での連作二十余首中の作であったと思います。

町　春草

けふもまたこころの鉦をうち鳴
しうち鳴しつつあくがれて行く

四十年近く前から、心にきざまれてきた牧水の歌は、私の青春の思い出のなかに、たくさんあります。そして、たくさんの歌を、色紙などにも書かせて頂きました。心豊かに――。

本田　実

山を見よ山に日は照る海を見よ
海に日は照るいざ唇を君

特別のめんどくさい感想はない、ただ私の心臓にジーンとひびくだけだ。牧水の絶唱だと思う。

中野　菊夫

夏はいまさかりなるべし、とある日の明けゆくそらのなつかしきかな

こういう作品をよむと、短歌の醍醐味を味うような感じがする。あかるくといってしまってはいいすぎるだろうが、気持の澄んだ人でなければ詠えない作といってよい。

大西　民子

幾山河越えさり行かば寂しさの
はてなむ国ぞ今日も旅ゆく

「白鳥はかなしからずや」の歌につづけてこの歌をよく歌う。歌詞の二番にあたるこの歌を歌いながら、私はつい涙ぐんでしまって声を詰まらせたりする。理屈ぬきに好きな一首である。

戸塚　文子

幾山河越えさり行かば寂しさの
終てなむ国ぞ今日も旅ゆく

じつは、たくさんあって困りました。尾鈴山や都井岬などの歌にも心をひかれ、迷いましたが、やっぱりこれ。まるで私の半世紀に近い旅行業の生涯に、ぴったり、くい込んで離れないのです。

千代国一

たへかねてとり出だしたる酒の
壜いまだ飲まねばくちもとに満
てり

〈さびしき樹木〉にある歌で、船中独酌とある。〈たへかねてとり出だした酒の壜〉に口元まで酒が満ちているのに喉を鳴らす牧水の姿が目に見えるようで、一読、言い難い懐かしさを覚えた。

谷　邦夫

釣り暮し帰れば母に叱られき叱
れる母に渡しき鮎を

この歌は牧水先生晩年の作で、連作「鮎つりの思い出」の中の一首である。先生の雅号は母の名のマキ（牧）と、故郷の渓川の水に因んだものという。そういう関連性を含んだ、郷愁と慕情の滲んでいる歌である。

田谷　鋭

阿蘇の街道大津の宿に別れつ

る役者の髪の山ざくら花

名歌、感銘歌にこと欠かぬ牧水の歌業からこの一首を掲げるのはいささかためらわれるが、わが少年時の夢のなごりは消しがたい。康成の伊豆の踊子の原型のようなやさしさを持つ一首である。

田中澄江

幾山河越えさりゆかばさびしさ
の果てなむくにぞ今日も旅ゆく

山中鹿介が殺された備中杉山の高梁川のほとりにいったとき、若山牧水氏は、ここでこの歌をつくられたと聞きました。二つの川のよりあう大きな眺めを前に人間の小さを思い感慨無量でした。

高安国世

麦畑のひとところ風の吹きたて
ば夕日は乱るその穂より穂に

しみじみとして飽きない歌と思います。麦畑も近ごろ少なくなったかと思いますが、よく目にしたこういう景色は、なんだか日本の風景として永遠にあるような気がします。

高野公彦

かたはらに秋ぐさの花かたるら
くほろびしものはなつかしきかな

草むらに寝ころんでゐると、かたはらで草の花が語りかける、亡ビタモノハ懐シィ、と。ロマンティックでやや感傷的だが、しみじみとした秋の情趣の漂ふ、味はひ深い歌である。

高橋健二

多摩川の砂にたんぽぽ咲くころ
はわれにもおもふひとのあれかし

私の子どものころはたんぽぽは一ばん身近な花であり、親しみをおぼえた。今は都会ではたんぽぽを見ることもまれになった。たんぽぽの咲くころを牧水と共になつかしまずにはいられない。

芹沢光治良

怠けゐてくるしき時は門に立ち
仰ぎわびしむ富士の高嶺を

牧水がわが故郷にお暮しの頃を知っていますが、私も仕事ができないで苦しむ時、牧水のこの和歌のように、自分も瞼に富岳を浮べて、こころを鞭打つことがあるから―。

寿岳文章

かなしきは樹の姿かもその葉そ
の枝静けく居りてよそ心なし

自己の弱みを知りつくしていた牧水の省察は、過ぎると時に自虐となりがちだが、この一首にはそれが全く見られず、「かなし」という美しい日本語の内容がみごとに表出されていて快い。

斎藤茂太

かへるさや酒の飲みたくなりゆ
くをじつとはぐくみ居るよ電車に

どうも適当な感想が浮んで来ません。ただこの歌を、口ずさみ、眺めていると心の安らぎを覚えるのです。

石井みさき

はつとしてわれに返れば満目(まんもく)の

冬草山をわが歩み居り

何気なくよみすごしてふとうしろ髪ひかれふりかえるとそこにこの歌がある……。こんな事を繰返して忘れられなくなった。

秀歌とは思はぬがこの悲しみが私を立ち止らせる。

葛原妙子

ああつひにあか児は泣をやめにけり妻の乳くびに喰ひいりにけむ

パターンの絶無な歌。生物人間母子の関係が歌われ、飢えた赤ん坊は母親の乳首を食いちぎりかねない予感に苛まれる。一代の抒情歌人牧水の或時代の意識下に潜在した苦悩の形とも受け取れる。

金田一春彦

地ふめど草鞋声なし山ざくら咲きなむとする山の静けさ

永い間眠っていた山が今春の活動をはじめようとしている、その生気溢れる大自然をこのように見事に表現していることにさすが詩人はちがうと舌を巻いております。

北原隆太郎

断崖（きりぎし）にかよへる路をわが行けば天つ日は照る高き空より

絶対矛盾的自己同一、逆対応の理を看る。この生の一歩一歩は万仞崖頭に臨むに等しく、破滅の危機も免れぬが、忽然、大日輪照四天下。日上無雲、麗天普照。蒼穹の果てに歩み入るは牧水底？

河盛好蔵

白鳥はかなしからずや空の青海のあをにも染まずただよふ

中学生の頃、新潮社から出ていた「現代自選歌集」のなかの「若山牧水集」で初めて牧水の歌をよみ、この一首に魅了された。以後、牧水というとまずこの歌がおのずから口に浮ぶ。

片山貞美

ひさしくも見ざりしかもと遠く来てけふ見る海は荒れすさびたり

大正八年作。構えずに歌い起す調べが生活的で、わざわざ見にきた海であるのに荒れ狂っているというところがまた人生的で、わたしは少年のとき記憶したのに、いまだにふと口をついて出る歌。

鹿児島寿蔵

うらうらと照れる光にけぶりあひて咲きしづもれる山ざくら花

牧水の短歌の特長から申せば、右にあげた淡白な歌詞よりもロマンチシズムな情緒のあるものの方が、適当なのであろう。

淡白なのをあげたのは私が八十という老人のせいかも知れない。

大屋正吉

うらうらと照れる光にけぶりあひて咲きしづもれる山ざくら花

大正十一年、湯ケ島温泉に遊ぶ、とある「山ざくら」一連の歌を読んだのは私の少年時代であったが、今でも鮮かにその当時のことが思い出される。流麗な調べが山桜の生態を描き尽くして余す処がない。

扇谷正造

幾山河越え去り行かば寂しさの
終てなむ国ぞ今日も旅行く

若いころは感傷の歌としてこれを好んだ。このごろは、別な解釈をしている。人生は旅一。片道切符の旅という事では今も昔も変りはない。ただ、辛いが生きて行くことに意味があるのだと思っている。

頴田島一二郎

かんがへて飲みはじめたる一合
の二合の酒の夏のゆふぐれ

朝鮮山中の一軒家で闘病中。短歌は作り始め。雑誌「創作」で出遇ったのではなかったか。わからぬまま記憶に残った。後日牧水名歌の一首に挙げられているのを知り、ひどく誇りに思っている。

岩波香代子

かたはらに秋草の花語るらく滅
びしものはなつかしきかな

短歌は吟ずるとき、いっさう味ふかく心にしみじみとする。牧水の歌は、静と寂にふかく、この歌は晩秋の高原を歩くと、実感がひしひしと迫ると同時に、牧水の心象でもあらう。らくの用法が一首全体にひびきをなしてゐると思ふ。

伊藤祐輔

白鳥はかなしからずや空の青海
のあをにも染まずただよふ

牧水は不世出の大歌人と思います。仮りに相問歌を詠ってもスケルが大きく万人の心をとらえる永遠の歌人だと思う。『君かりに彼の大海に思はれて言い寄られなはいかにし給ふ』など。

市山盛雄

おのづからよろづの味のもとと
なる亀甲萬のむらさきぞ濃き

昭和二年御渡鮮の時小宅でお詠み頂いた作です。素晴らしい傑作で、先年刊行した亀甲萬史の巻頭にも中央研究所前の朝倉文夫作碑に並べての建碑も野田市名物の一つとなっている有難い作です。

石黒清介

山山のせまりしあひに流れたる
河といふものの寂しくあるかな

自然の実相をとらえて暗示的である。山と河は特定な山と河ではなくていい。どこの山でも河でも読者は自由に思い出の山河をあてはめて鑑賞すればいい。敬虔な青春の苦悩といったものが偲ばれる。

飯田莫哀

わが庭の竹の林の浅けれど降る
雨見れば春は来にけり

上野公園の貸席、韻松亭で、歌会を催

した時、床の間に、この歌の半折が掛けられていた。丸みのある肉太の文字は、一字一字作者のお人柄を想わせる柔かさが、にじみ出ているのが印象的だった。

阿木翁助

われ歌をうたへり今日も故わか
ぬかなしみどもにうち追はれつつ

若い作者の溢れる様な創作意慾がダイナミックなリズムとなっているようです。

船山馨

白鳥はかなしからずや海の青空
の青にも染まずただよふ

「幾山河」をはじめ、牧水の歌はすべて好きですが、孤独感を一幅の清冽な絵画としてみせた、この作はとくに心を離れません。若年の時には、それなりに、老境に入っては又別種の深い感銘が迫って来ます。絶唱とはこういう作品を申すのでしょう。

長谷川ゆりえ

枯れ伏して草すさまじき如月の
野に啼きすますうぐひす一羽

日本の二月の荒涼たる風景の中に、一羽のうぐひすが、清い声を、ひきしめて啼いてゐる。よみながら、わが身のひきしまるのを感じました。

古関裕而

白鳥はかなしからずや空の青海
の青にも染まずただよふ

ＮＨＫラジオドラマ「音楽五人男」の主題歌として、この歌を取り上げ、作曲したのは戦後間もない昭和二十二年頃の時。短歌の作曲はそれまでにも沢山作ったが、この曲が傑作の一つと言はれた理由は、歌い易さと、感情の豊かさに溢れていたからでもあるが、何よりも盛り上る詩心を感じた己の創作慾。楽想が完全に一致し、一気呵成に書いたからであろう。

岡田喜秋

わがこゝろ澄みゆく時に詠む歌
か詠みゆくほどに澄めるこゝろか

「歌と宗教」と題したエッセイ中の一首。「私は宗教といふものを持たない」という言葉で始まるこの短文を含めて、歌に対する牧水の姿勢が吐露されていて印象ぶかい。「樹木とその葉」所収。

榎本尚美

よりあひて真すぐに立てる青竹
の藪のふかみに鶯の啼く

若山家の長女篁子との結婚が決まった時、この歌の半折を贈られた。藪医者の所へ藪の軸を持って、藪みたいな名の子がお嫁に来ると、私共一家は大いに喜んだものである。

◇そして第三章社内特集である。

百巻記念号の一番の主題である社友特別作品集㈡には社友の殆ど及び有志が御参加下さり、随想もそれぞれよき作品をお寄せていただいた。創刊百巻の何よりの記念となった。

短歌新聞社の石黒清介氏のお歌について。昭和二十七年新潟から上京されてまもなく喜志子を訪ねられて以来の長い御縁にて「創作」の大会には必ずと言っていい程御参列下さり家族共々親しくさせていただいた。「新創作」再刊に当たっても様々御助言賜り、この度の百巻記念号には欠かせない方でいらした石黒氏。平成二十五年一月二十七日御急逝とのお報らせに言葉を失った。主宰と共に弔問に上がった折百巻の事も心に掛けて下さっていた由伺い本当に残念で、せめてお歌をと奥様にお願いして頂戴したお気に入りの短歌七首によって百巻の棹尾を飾らせていただき感謝の意を表した。

◇第一章の特別寄稿について。

「百巻記念号の巻頭を飾っていただいた二十名の皆々様にはお忙しい中を書き下ろし玉稿を賜りまして誠に有難うございました。皆様のお心こもるお言葉によって錦上花を添えていただきました「創作」百巻記念号。光栄この上もなく心より感謝申し上げ、ここに御礼を申し上げます。」

以上であるが、昭和十五年牧水十三回忌並びに大会記念号の出席者名簿に生後八ヶ月の私の名が記載されて以来七十三年、直接間接に「創作」に関わってきた私にとって、若山聚一主宰と共に先達の努力の結晶を百巻としてここに纏める事が出来たことは感無量である。また共に編集に当たった歌代選者はじめ編集委員の方々にも感謝申し上げ度い。尚、諸々の事情により発行が大幅に遅れたことを心からお詫び申し上げる。

◇

『詩歌時代』について

昭和三年牧水他界後、その追悼号にも多くの方が思いを寄せておられる『詩歌時代』。

本来の『創作』からは少し離れはするが、牧水の一生を語るに、はずすことのできない『詩歌時代』について、この『創作』百巻の年に記念として一言書いておきたい。

—大正十五年五月発刊の『詩歌時代』は小生早稲田卒業の頃から芽生えていた構想で、こうした雑誌を出したいと考えることは随分と久しかった。例えば『創作』についても単に『創作』だけではなく、上に「歌の雑誌」と冠詞をつけねば通りがわるいという風なことは小生の長く不快に感じて来たことであった。が、後ではそんなことはどうでもよくもう少し真面目に根本的に即ち詩歌そのものの根底について考えられるようになった。我らにそう大きなことは言えないまでも、少なくもこの時代の各詩型による日本詩歌界の鳥瞰図を作っておくだけでも決して無意味ではないと思い出したのである。—牧水

それは詩歌総合雑誌として長詩・散文詩・短歌・俳句・民謡・童謡等いわゆる「詩歌」の範囲に属するものを網羅することが以前からの想いであった。詩歌といえばそれ等の間の交流がありそうなのだが実際には歌壇、俳壇とそれぞれ独立していてその間は何らの交流も理解もなく、もちろんその総合雑誌に類するものもなく、それを実現することは牧水の歌人として、また文芸を扱うものとしての生涯の夢であったのである。が、現実は厳しく大正後半少し落ち着いてきたその頃になってまたまた湧き上がった思いであったのだ。

事前の準備期間を経、『詩歌時代』として五月創刊と決まり、投稿を募集するので選者を各々に依頼、長詩を白鳥省吾、民謡を北原白秋、

童謡を野口雨情、散文詩を福永渙、俳句を荻原井泉水と錚々たる面々に頼み、快諾を得て具体的に動き出し夥しい投稿数に各選者が驚愕したほどのスタートであった。上記目次の最後に各選者の、選にあたっての感想があるが、各々の分野での本質を真摯に語っているのをみても(紙面の関係でご紹介できず残念だが)各選者の『詩歌時代』に寄せる期待の大きさがうかがえる創刊号であった。

各号の評判もよく読者投稿者も増えていったが、余りにも計画が大きすぎて一番の問題の資金が続きそうになく断腸の思いで六号にて廃刊せざるを得なかった。多大な借財とストレスの中少しでも返済をと無理な揮毫旅行を続け結果的に命を縮める一つとなったのである。胸中の無念如何許りであったかと痛ましくも悲しい。

しかし菊池寛創刊の『文藝春秋』とほぼ時期を同じくして発刊した詩歌総合誌の構想は、ジャーナリスト牧水の面目躍如と誇りに思いたい。

―『創作』百巻記念号より(榎本篁子)―

次に、『創作』に掲載された社友の方々の「牧水・喜志子への追慕の念」及び「私の愛誦歌 牧水・喜志子のうた」を紹介する。

牧水・喜志子への追慕の念

牧水忌　竹中皆二

午前七時五十八分香をたく我忘れざりき
六十六年

喜志子臨終の床　長谷川銀作

ひと度もこの人を義姉と呼ばずして手を
握られき死の五日前

若山喜志子夫人を悼む　高橋希人

うつし世を去りゆく君をわが見ずてもど
かしきかな我も病めるに

牧水との日々　大悟法利雄

牧水に七十八十の歌はなしわれ作らむぞ
そのよき歌を

◇

私の愛誦歌　牧水・喜志子のうた

抄　若山　富士人

さらばいざさきへいそがむ旅人は裾野の
秋の草枯れてきぬ　牧水

山のあなたのそら遠く「さいはひ」住む
と人のいふ　噫　われひとと尋(と)めゆきて
涙さしぐみかへりきぬ　山のあなたになほ
遠く「さいはひ」住むと人のいふ

牧水が愛誦したブッセの詩である。旅ごころやみ難く身辺の俗事雑事の絆を断ち、漸くの思いで出でたつを得た旅であったが、その旅先でも心安んずるを得ず、なお遠く住むという「さいわい」に憧れ、尋め行かずにはおられぬ旅びとの心、喜志子をして「汝がつまは家にはおくな旅にあればいのち光るとひとの言へども」と嘆かしめた牧水の旅心は、没後五十余年、旅の様態が大きく変容した現代に於ても変わらぬ感銘を以て人の心を打つ。

一連の作中「惶しき旅人(りょじん)のこころ去りあへず秋の林に来て坐れども」も同系統の歌で、私の愛誦するところである。

抄　若山　とみ子

わがいのち闇のそこひに濡れ濡れて蛍の
ごとく匂ふかなしさ　牧水

人を愛する苦しみと生きることに疲れ果てた魂が、闇の底でしずかに横たわっている。

自分をとり巻いているのは深くて暗い闇のみだ。そこから今は逃がれる事が出来ない。その闇の中の自が命の上に暖かく降り注がれているもの、それは去って行った人の涙か、熱い愛情なのか。または己を包んでいる闇のやさしさなのか。己が魂は、それらのものに濡れながら、まるで、蛍のように青くひかりつつ息づいている。

悲哀に満ちた美しい相聞歌だ。純粋にものを見ることが出来、純粋に人を愛することの出来る人のみが詠み得る心打つ歌である。

抄　若山　いく子

五十五年朝夕を共に過し来てこの母は何を与へたりしや　　喜志子

喜志子が亡くなるひと月前に、「創作」吉野大会があった。代理で出席した夫は帰ってから母に「やっぱり僕も創作に歌を出していこうと思いますよ」と話しかけた。この言葉を受け止めた喜志子の半信半疑の表情。その翌日「旅人の歌を見せて欲しい」と改まって言われ、私は歌のノートをお渡しした。

十日程経て「述懐」と題する五首の原稿を見せられ、私は慄然としたが、これが「創作」九月号の絶詠となった。母の死以来十五年、この歌は常に私と共に在り、この歌の故にこそ、夫と共に「創作」に関わる現在があると思う。「この母は何を」の第四句は、息子に訴える万感を深く鋭く暗示していて「赤い入日」の歌に始まり「五十五年」の歌に終わる母と子の絆をあらためて思い、歌の心に生きねばと強く思うのである。

胃の腑などあるさへ忘れ「創作」の日々を
励みき楽しかりしを　若山いく子絶詠

次に、牧水の長男旅人の「喜志子の遺したもの」及び「牧水を詠める」を紹介する。

喜志子の遺したもの　若山　旅人

喜志子が逝って二十年（掲載当時）経つ。その臨終の床での喜志子の言動は彼女にとって、最後の脱皮だったのだろうか、枕頭の人々にひとりひとりの握手をもとめ、両側に居た私と太田家の当主邦彦の二人については、かたく一つに引き寄せた手を永く握って放さなかった。

喜志子の八十年の生涯はこうした「脱皮」の連続だったと思う。娘時代からの脱皮、牧水との結婚によって生じた文学の道へのあきらめ、牧水の没後「創作」に直面してからの脱皮、終戦で無一物になってからの脱皮、などこれらはすべて喜志子の持って生れた覚悟の演繹がそれをもたらしたものと考える。物ごとはどんなことであろうが、すべて覚悟で仕切ってゆく喜志子の一生であった。

その夫の逝きし九月に死なましとかなし
きのぞみを吾等に告らす

星つばらつばら四方も果敢なくつめたき
夜たまさか空に舞ふ母を視る

牧水を詠める　若山　旅人

ひととはせ長かりしかな牧水に関はりし
のみに年暮れなむとす

真の美に浸りゆく刻の哀しみをまたたき
やまぬ父の目にみき

父とのみ思ふこころにあらざりき死した
る後の大きかりしに

牧水を父に喜志子を母に持ちわが残生の
このあやふさは

峡くだるときのあせりもわすれはて海に
還らむ大観にあり

海にそそぎ天にのぼりて山に降り流れて
かへる輪廻羨しき

次に、『創作』第百六巻第二号及び終刊号に書いた「牧水の書」について紹介する。

牧水の書

榎本　篁子

『創作』第百六巻第二号より

平成十八年『創作』復刊以来十三年、「牧水の書」欄を担当してきたが今号をもって幕を閉じることとなった。

歌に生き、旅を愛し、酒を心の栄養として畏み、人間を愛しみ、己は自然の一部であり自然の裡にあることを確かめる為に生きた牧水。自然、人生、身の巡りに対して常に問いかけ真向かったものが歌となったのである。

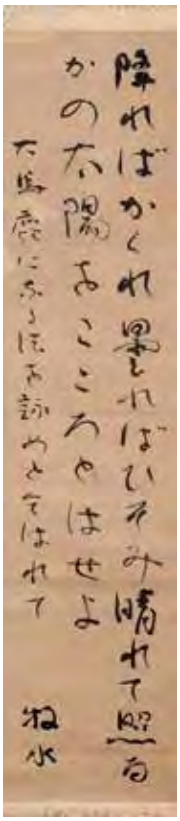
しかしその歌は驚く程に平明であった。牧水の歌の平明な表現の奥にある深い思いに、若者は青春の、中高年は人生経験の共感を重ねあわせ、それを表現したい読者の欲求を満たしてくれるが故に、牧水の歌は多くの人に愛唱され、親しまれたのであろう。

その牧水をより求め尋ねたいとするもののよすがには「その手によって書かれた書」「その声によってうたわれた朗詠」が挙げられよう。この二つは正しく牧水自身、体現なのである。残念ながらその声そのものは、時代の流れにタッチの差で乗ることができず現存しないが、その書と手紙類は、日本各地に多く認められる。

その遺された多くの書を若書きの頃からみてゆくと、牧水のその時の心のうごき、背景、健康状態までが観る者に迫ってくる。

それ故、数ある牧水の墨蹟の一部ではあるが、その背景などを含め、知っていただけたらとの思いで「牧水の書」欄を担当してきた。

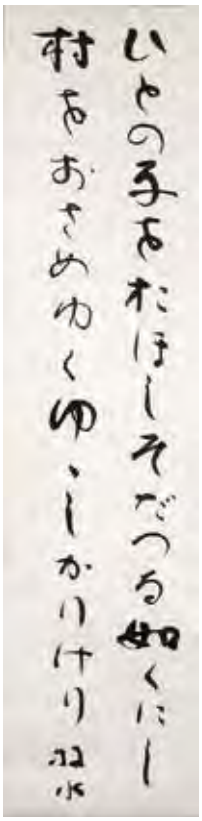
最終号の今号では既に『創作』誌上で近年取り上げた新発見の牧水の歌の代表的な四点を挙げる。



降ればかくれ曇ればひそみ晴れて照るかの太陽をこころとはせよ

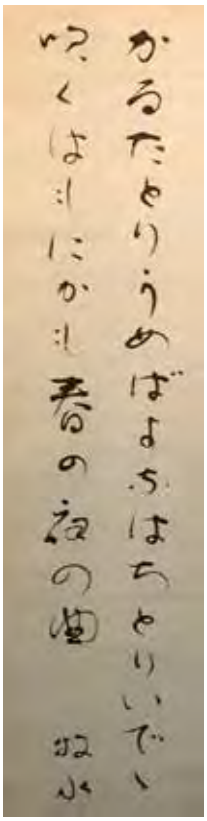
大馬鹿に奈る法を詠めと乞はれて　牧水

（宮崎県立図書館蔵）



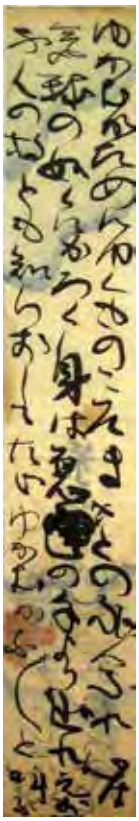
ひとの子をおほしそだつる如くにし村をおさめゆくゆゝしかりけり　牧水

（日向市若山牧水記念文学館蔵）



かるたとりうめばよちはちとりいでゝ吹くはもにかも春の夜の曲　牧水

（宮崎県　個人蔵）



ゆかむがためにゆくものこそまことの旅人なれ　心は気球の如くにかろく身は悪運の手より逃れえずなんの故とも知らずして　たゞゆかむかな〳〵と叫ぶ

佛国　ボードレール作
日本　永井荷風　訳

香川県直島歌碑に刻

（沼津牧水会蔵）

これら未発表のうたは、偶然にも牧水の故郷日向市、終焉の地沼津市が舞台であった。また「ボードレール」は牧水の旅の原点といえる詩を旅先の香川県直島で揮毫した短冊である。それぞれ全国的に話題となった牧水新発見の歌である。

なかでも巻頭の「降ればかくれ」の太陽の歌は前号『創作』新年号でそのいきさつを御報告したが、宮崎県在住の牧水愛好家故小林邦雄氏並びに御遺族が多くの蒐集品を牧水没後九十年を記念して宮崎県立図書館に昨年十一月寄贈された。

その中の一点が未発表の「降ればかくれ」で、父旅人が鑑定の折からどうしても手元におきたいと切望していたものであった。この禅問答のような深い意味を持つ歌が牧水の故郷に帰ってきて、私も二十四年ぶりに宮崎で目にする機会を与えられた不思議な縁を大切に『創作』最終号の巻頭を飾ることを宮崎県立図書館にお許しいただいた。

以下に若山旅人の牧水のうたへの思いを挙げて筆を擱く。

―牧水の歌には誰の心にも理解できる易しさがある、あるいは安らかさと言ってもいいかも知れない。そして如何にも一人きりになっている事の孤独さを漂わせている。難しい熟語もなければ、もって廻った言い回しもなく、実に平明で大らかだが、本当は此処まで来るのにその歌は何度かの推敲を経て考え直されているのである。けれども出来上がってみると牧水特有の柔らかな声調のなかに、もの優しい世界が創り出されていて、むつかしい固い表現の字句は総て削り落とされてしまい、自然で自由な境地だけが残っている事になる。この特質は牧水の持って生まれた全てに云える事だった。酒に酔ってもその酔いの中に自分孤りを凝視(ひとみつめ)ている感じ、旅に出ても山や谷の自然の中に自分一人が溶け込んでいる感じ、こういう感得のしかたがおのづからこの世に牧水が遺したものの殆ど全てに理屈を洗い落とした天然自然のままを現している事になっているのでは無かろうか。

若山旅人

『創作』最後の牧水の書　榎本　篁子

『創作』終刊記念号より

平成十八年より十三年担当してきた「牧水の書」も終刊に伴い最後となった。

再刊後この欄を設けたのは、牧水・喜志子の伝記の範疇を越えた人間的な面等エピソードも含めて遺族の観点から記せたら、の思いで続けてきたつもりである。

しかし本年は牧水生誕百三十四年、没後九十一年、喜志子生誕百三十一年、没後五十一年と、その活動を記すには『創作』終刊がいささか早すぎたのであろうか、反語ではあるが、心が残る。

この牧水の本質を感じとり愛して下さった皆さまのおかげで百九年にも亘り牧水の世界が生きつづけてこられた事に感謝を捧げ、皆さまに御礼を申し上げます。

なお、終刊記念号の特別企画として今回延岡市の夕刊デイリー社の連載「短歌誌『創作』明治・大正・昭和・平成つないで109年」シリーズを転載させて頂いた。

三月の終刊直後に百九年にも及ぶ『創作』の歴史を総括しシリーズとして特集下さったもので、夕刊デイリー社また佐藤隆一前編集長に心よりの御礼を申し上げる。

ジャーナリズム勘の鋭かった牧水が、青春時代を過ごした町「延岡」でのタイムリーな特集記事にどんなにか感謝していることだろうか!!と思いを馳せた。

その『創作』終刊を告知する記事と第一回目の記事を皆様にもご覧いただきたい。

牧水創刊の「創作」3月で終刊

明治43年から営々109年目

牧水が明治43年に創刊し営々と発行してきた「創作」

若山牧水が明治43（1910）年に創刊した短歌誌「創作」が3月号で終刊することになった。9月に終刊記念号を発行するという。

牧水の没後、発行は妻喜志子―長谷川銀作（喜志子の妹潮みどりの夫）―旅人（牧水の長男）―富士人（同次男）―とみ子（富士人の妻）と受け継がれてきた。

平成17年に終刊が危ぶまれたが、牧水の孫（旅人氏の長男）の若山聚一（しゅういち）さん、榎本篁子（むらこ）さん（旅人氏の長女、沼津市若山牧水記念館館長）が中心となって復刊。同25年に歌壇の祝福を受けて「創刊100巻記念号」を発刊した。

短歌結社の多くは会員の減少、高齢化などで運営が難しくなっている。

「創作」は平成26年から月刊を隔月刊としていた。聚一さんは終刊せざるを得ないことを今年1月号で発表し「社友の多くは高齢の方が多く、退社される方が相次ぎ、ついに経営的にも継続が難しい状態になってしまいました」と説明している。

記者手帳

2019・1・11

若山牧水は明治43（1910）年、「創作」の創刊号に「詩歌雑誌には常に経営難という大厄が伴ふ。渺茫たる大海は眼に満ちて面前に開けている。我らはいま将に渚を離れて小さな帆を上げむとしつつある」と書いた。

▽▽

牧水の没後、妻、子、孫へと若山家の人たちが中心になってリレーしながら発刊を続けてきた。平成17年12月号で終刊が危ぶまれたが、「創作」に発表することを楽しみに歌を詠んでいる社友や歌壇に悲しむ声が広がった。すると父旅人さんの苦労を見て遠ざかっていた長男の聚一さん（77）が「若山家として逃げるわけにはいかない」と引き受け、姉の篁子さんと協力して発行を続けた。

▽▽

聚一さんが引き継いだ時、通算93巻（1年で1巻）だった。心臓の手術をした直後だったという。当時の編集者欄に「せめて100巻までは続けたい」と書いている。そして平成25年、分厚い「百巻記念号」を発刊した。

▽▽

聚一さんが引き継いで今年で13年。先日届いた1月号に「本当に残念ですが、3月号で終刊し、9月に『終刊記念号』を刊行します」と書かれていた。篁子さんも「熟慮を重ねましたが…牧水の没後90年、喜志子没後50年の記念の年、奇しくも平成の終焉を迎える折り目の年に明治、大正、昭和、平成と多くの社友の方々と過ごすことができた折り目の年にお別れすることを牧水、喜志子、先達の方々、現社友の皆さまもお許し下さるのではと結論を下した次第でございます」と。（R・S）

平成 31 年 1 月 11 日（金）夕刊デイリー

「創作」の今年3月号＝第106巻（106年）第2号＝。9月に終刊記念号が発行される

若山家が代々編集・発行

若山牧水が明治43年に創刊

短歌誌 創作

明治・大正・昭和・平成つないで109年①

若山牧水の編集で明治43（1910）年3月に創刊し、何度かの休刊をはさみ、通算109年、実質106年（106巻＝1年1巻）にわたって発刊してきた短歌結社「創作社」の短歌同人誌「創作」が3月号で終刊した。今年9月に終刊記念号を発行する。

昭和3年に牧水が亡くなった後、「創作」の発行は、妻喜志子―長谷川銀作（喜志子の妹潮みどりの夫）―旅人（牧水の長男）・いく子夫妻―富士人（同次男）―とみ子（富士人の妻）各氏が受け継いできた。

とみ子さんが編集・発行していた平成17年に終刊しそうになったが、牧水の孫（旅人氏の長男）の若山聚一（しゅういち）さん、榎本篁子（むらこ）さん（旅人氏の長女、沼津市若山牧水記念館館長）が中心となって復刊。平成25年に金字塔となる「創刊100巻記念号」を発刊した。

▽　▽

日向市東郷町坪谷に生まれ、延岡市で歌人としての道を歩み始めた国民的歌人、若山牧水が創刊し、明治、大正、昭和、平成の長きにわたり、若山家が代々にわたって編集、発行を引き継いできた短歌誌「創作」の終刊を惜しむ声が広がっている。「創作」の軌跡をたどる。

最後に

本公益社団法人沼津牧水会も新年度がスタートし、五月には恒例の総会開催が予定されている。

五月といえば、まもなく端午の節句「こどもの日」を迎える。三人の子を伴って沼津に居を移し、その後生まれた次男富士人の成長も見守った八年、子供好きの牧水にとってそれぞれの子供のこれからの人生をより強く思ったであろう。沼津に移る前後からその頃発刊した児童図書『金の星』『金の船』の参加者となり、野口雨情などと共に中心となって活動をしていた。それは『創作』百巻口絵にも紹介したが、他に長男旅人の詩と絵を掲載したり等、牧水が子供に対しての文学的環境づくりを心掛けていたことがうかがえる。

なお、金の星社は昨二〇一九年百周年記念を迎え、上野の森美術館で「子どもの本の一〇〇年展」を開催している。

このように日本の児童教育の素晴らしさ、知的水準の高さは室町時代からの寺子屋制度を取り入れ、有識者が江戸時代から庶民の子供に「読み書きそろばん」という教育の基本を子供たちに行っていたことによると言えよう。

まもなく迎える「こどもの日」にあたり、全ての子供たちの上に幸多い将来のための教育と心身の無事を祈らずにはいられない。

若竹の伸びゆくごとく子ども等よ真直ぐ
にのばせ身をたましひを
をさな日の澄めるこころを末かけて濁す
とはすな子供等よやよ

すみやかに過ぎゆくものをやよ子等よ汝(な)
が幼な日をおろそかにすな
人の世の長きはげしき働きに出でゆく前
ぞいざあそべ子等

老いゆきてかへらぬものを父母の老いゆ
くすがた見守れや子等　　牧水

◇

静岡県沼津市は牧水終焉の地。晩年の牧水の心の安らぎは、正に沼津に於いて叶えられたものであった。

最晩年の「創作社便」の最後に「この頃、自分自身が自然の一部だと思うようになった。そのように思えるようになった自分自身に感謝している」と述懐しているが、それこそ、朝夕を庭内のような千本松原で過ごし、その松原の草木と一体になって心を通わせたことにも由来していると確信している。

波乱に満ちた生涯ではあったが、山国の宮崎県日向市に生まれ自然と親しみ、延岡市で充実した青春時代を送り、その後、心の旅を繰り返し、沼津にたどり着いて他界した牧水。

その一生を『創作』を中心において過ごした牧水が、没後九十年を経て、百九年もの間その残した『創作』のなかで生き続けてこられた幸せに、また関わってきた我々関係者の幸せに感謝を捧げたい。

そこには多くの社友の方々はもちろんのこと、全国の牧水顕彰会の皆様の大きな愛情、御努力によるものと有難さに頭を垂れるのみである。

翻(ひるがえ)って牧水は何と幸せな人であろうか。

それに対し、牧水自身は恥じ入り、恐懼(きょうく)しているのでは？と『創作』百九年を迎えた今日思うのである。

冒頭にお書きしたように、皆さまが「牧水次の時代」を照らす希望となって下さることを心より有難いことと感謝申し上げてここにお別れ申します。

生命の影重きを載せて一世紀「創作」百
巻畏みて編む

いしぶみの文字の深きをさぐるとき捧げ
し酒に指をぬらしぬ

きのふよりけふは深まる親しさに別れの
宴の立ち去りがたし　　榎本　篁子

幾山河こえさりゆかば寂しさのはてなむ
国ぞけふも旅ゆく　　若山　牧水

（牧水第一号歌碑・沼津市千本浜公園内）

第66回 沼津牧水祭 短歌大会

十月六日(日)
午前十時三十分
沼津市立図書館
視聴覚ホール

沼津牧水祭・短歌大会は、講師に「かばん」会員、日経歌壇選者、エッセイスト、翻訳、絵本等幅広く活躍する現代短歌の代表的な歌人穂村弘氏をお迎えして開催された。氏は、歌集『シンジケート』でデビューし、歌集『水中翼船炎上中』で第二十三回若山牧水賞を受賞された。『水中翼船炎上中』の巻頭歌は、

お天気の日は富士山がみえますとなんともなんどもきいたそらみみ

午前は「言葉の不思議」の題での講演。その内容を要約する。何となくしゃべっている言葉は社会の変化と共にある。社会は生きる人のもの。世界はありとあらゆる人のもの。死者、未来人も世界のメンバー。短歌や詩の側の言い分は、社会と反対に考えること。啄木の歌はひんやりしたという感想だ。牧水の、自分は白い鳥として生まれたので永遠に青い鳥にはなれないし、青に染まらないから哀しいという歌は誰も作れない。牧水は天性の歌人。詩は、言葉を別のものに置きかえると発生する。最善の並びなのかよく考えることだ。

午後は歌評。日常と違う文字使いを学習する。短歌は何を書いて何を書かないかで成立する。口語短歌の欠点は、結句のバリエーションがものすごく少ない。体言止めがめちゃくちゃ多い。呼びかけにするとよい。結局最後は心。誰とも違う心を書くこと。小説は引き算、詩は掛け算。短歌は現実を映しているわけではない。腕まくりをして、よいお声での素敵な歌評であった。

講師選の沼津牧水賞三首と出詠者による互選賞七首を紹介する。

(本会会員　矢端純子)

沼津牧水賞一席　浜松市　大庭拓郎
忘れたる砥石さがしに行く土手に生れしばかりのカマキリに会う

沼津牧水賞二席　静岡市　飯田ふみ代
惑星のあまたの径のそのひとつ選りて児童ら嬉々と下校す

沼津牧水賞三席　沼津市　元久由子
母九十二歳目覚めてヨイショ箸もってもヨイショと呟く闇　祓うごと

市長賞　沼津市　勝俣徳夫
風に揺れカラカラカラと鳴る絵馬の個人情報そっと覗きぬ

市議会議長賞　沼津市　長野堯子
釣り人のほどよき距離で並びけり逆さの富士を鴨が崩して　(田貫湖にて)

教育長賞　沼津市　柳田はるみ
八年をずつとかうして居ましたと亡き母の家(や)に物たちのこゑ

商工会議所会頭賞　沼津市　桜井光子
履き心地確かめながら靴を買う九十一歳誕生日なり

観光協会会長賞　静岡市　黒柳　爽
スコップに両足乗せて深く掘るスギナの根っこの先まだ見えぬ

沼津朝日新聞社賞　駿東郡清水町　前田鐵江
くすぐつたい匂ひがするよジャージーの高校男子とすれ違ふとき

マルサン書店賞　東京都中野区　林　史欣
蒼き山水清く湧くわが郷をリニア線が突き刺して行く

第66回 沼津牧水祭

碑前祭・芝酒盛

十月二十日(日)午前十一時

十月十二日に台風十九号が伊豆半島に上陸し、多くの爪痕を残していった。幸いにも牧水歌碑周辺には被害がなく、十月二十日は晴天に恵まれ、頼重秀一沼津市長の代理としての芹澤一男教育次長、奥村篤教育長、梶泰久沼津市議会副議長をはじめとする市議会議員有志のご臨席のもと、東京牧水会、愛知牧水顕彰会、土肥若山牧水顕彰会の方々など、遠方からも多数のご参加をいただき、「沼津牧水祭」の「碑前祭・芝酒盛」が開催された。

林茂樹理事長が、開会の挨拶で、沼津にも大きな被害をもたらした昭和三十三年の「狩野川台風」と同等クラスの最強台風十九号による被害に遭われた方々へのお見舞いの言葉を述べ、沼津の「お宝100選」に選ばれている若山牧水が、「広報ぬまづ」に再度掲載されたことを紹介し、「沼津の宝」である千本松原を大事にしていただきたいと力強く語った。

来賓を代表して、芹澤一男教育次長が頼重市長の祝辞を代読し、奥村篤教育長から、「中学生短歌コンクール」に中学生たちが参加することによって、自分たちの生活をじっくりと見直すよい機会となり、沼津の素晴らしい自然の中で感性を磨き、成長していく姿をとても楽しみにしているとの祝辞があった。

榎本篁子館長の代理として、館長の弟・若山三郎氏と美恵子夫妻による歌碑「幾山河」への献花と献酒があり、若山三郎氏が挨拶で、松の伐採反対運動に立ち上がった牧水は、自然保護運動の先駆者であり、一歌人ながら戦いぬいた素晴らしい人だった。牧水が大切にしてきた沼津が私も大好きであるとおっしゃられ、会場から拍手があがった。

花柳寿宗師の「牧水を舞う」につづき、「中学生短歌コンクール」の表彰式が行われた。沼津市内全十九校の中学校から一五五七首の応募があり、特選十首の内、出席した八名が大きな拍手の中、緊張した様子で賞状を受け取った。髙田紹代さんの牧水「沼津を詠んだ歌」の独唱、「牧水のうたを歌う会」の合唱が会場を魅了し、式典は終了した。

次いで、ご来賓の方々による鏡開きにつづき、梶泰久市議会副議長の乾杯の音頭で、「芝酒盛」が開宴した。オリジナル弁当と樽酒の振舞いが参加者を喜ばせ、会場は盛りあがりをみせた。

再度登場した髙田紹代さんの牧水「酒の歌」の独唱、岳心流沼津愛吟国風会の詩吟、ぬまづ観光ボランティアガイドと沼津ハーモニカクラブ・千本ハーモニカクラブの合同での合唱と合奏、次々と演目がつづく。みんなで歌おう「日本の歌・牧水の歌」が始まり、牧水短歌の朗読と参加者の合唱で、会場が和やかな雰囲気に包まれた。

「芝酒盛」の最後を締めくくる「裾野五竜太鼓保存会」が登場すると、会場から「待ってました!」との掛け声がかかる。体の芯まで震えるような迫力のある太鼓の演奏に、会場からは大きな拍手と歓声があがった。

次年の再会を願いつつ、金子安夫実行委員長の挨拶で「碑前祭・芝酒盛」は盛会裡のうちに閉会となった。

文　化　講　座

初心者のための短歌講座

日　時　平成31年４月～令和２年２月
毎　月　第２土曜日　午前(全10回)
講　師　永久保　英　敏　氏

牧水記念館短歌会

日　時　平成31年４月～令和２年２月
毎　月　第２土曜日　午後(全10回)

牧水記念館俳句会

日　時　令和元年５月、９月、令和２年１月　午後(全３回)
講　師　榎　本　好　宏　氏

書　道　講　座

日　時　平成31年４月～令和２年３月　毎月第３火曜日　午後(全９回)
講　師　成　田　真　洞　氏

サロン音楽の夕べ

沼津市若山牧水記念館ラウンジ

古楽コンサートシリーズ 39 「リコーダー今昔物語」

日　　時：令和元年９月14日（土）午後６時45分
出　　演：武石富士雄（リコーダー）
　　石和美和（リコーダー）
　　青木里砂（リコーダー）
　　中村孝昭（チェロ）
　　杉山佳代（チェンバロ）
来 場 者：79人

牧水の空間に遊ぶ
「モーツァルト＆ドビュッシー　ピアノと歌曲の夕べ」

日　　時：令和元年11月３日（日）午後６時30分
出　　演：嘉者熊真弓（ソプラノ）
　　石川晴恵（ピアノ）
　　岡田千香子（メゾソプラノ）
　　小森俊明（ピアノ）
来 場 者：123人

平成31年度事業報告

総　会

第33回　定時会員総会　令和元年５月８日(水)午後6時～7時

理事会

第１回(通算170回)　平成31年４月９日(火)午後6時～7時
第２回(通算171回)　令和元年５月８日(水)午後5時20分～5時30分
第３回(通算172回)　令和元年８月７日(水)午後6時～6時25分
第４回(通算173回)　令和元年12月11日(水)午後6時～7時10分
第５回(通算174回)　令和２年３月12日(木)午後6時～7時

会　報　第32号　令和元年５月15日発行

館　報　第63号　令和元年９月１日発行
第64号　令和２年３月１日発行

1　調査研究事業

(1)　第69回 日向市の「牧水祭」へ祝電(主催：日向市、日向若山牧水顕彰会)
日　　時：令和元年9月17日(火)午前9時30分
会　　場：日向市東郷町坪谷　若山牧水生家裏牧水歌碑前及び牧水公園「ふるさとの家」

(2)　第63回 暮坂峠「牧水まつり」へ祝電(主催：牧水詩碑保存会)
日　　時：令和元年10月20日(日)午前11時
会　　場：群馬県吾妻郡中之条町　暮坂峠

(3)　第20回 「百草園牧水歌碑祭」へ参加(主催：東京牧水会)
日　　時：令和元年10月27日(日)正　午
会　　場：東京都日野市百草　京王百草園　牧水歌碑前
参 加 者：金子安夫、小出和夫、原悦子、三宅芳則、山下数高

(4)　第24回 若山牧水賞授賞式
(主催：宮崎県、宮崎県教育委員会、宮崎日日新聞社、延岡市、日向市)
日　　時：令和2年2月12日(水)、13日(木)
会　　場：授賞式　宮崎市　宮崎観光ホテル、
記念講演会　延岡市　カルチャープラザのべおか

(5)　第86回 延岡市の「牧水歌碑祭」(主催：若山牧水延岡顕彰会)
日　　時：令和2年3月15日(日)　⇒　延　期(延期日未定)
会　　場：延岡市　城山公園内　牧水歌碑広場

(6)　さくら市ミュージアム特別企画展
「自然歌人　高塩背山～若山牧水とゆかりの人々～」
開催期日：令和2年2月15日(土)～3月15日(日)
資料貸出：46点
貸出期間：令和元年12月24日(火)～3月19日(木)

(7)　月刊「清流」通巻313号に沼津市若山牧水記念館紹介記事掲載
取　　材：令和2年1月21日(火)

2　第66回 沼津牧水祭の運営

(1)　短歌大会
日　　時：令和元年10月6日(日)午前10時30分～午後4時
会　　場：沼津市立図書館　視聴覚ホール
講　　師：穂 村　弘氏(歌誌「かばん」会員、第23回若山牧水賞受賞者)
応募短歌：106首
参 加 者：84人

(2)　碑前祭・芝酒盛
日　　時：令和元年10月20日(日)午前11時～午後2時30分
会　　場：千本浜公園　牧水歌碑前
参 加 者：390人

3　文学講演会及び文学講座等の開催

(1)　第32回「雛の歌会」
日　　時：令和2年3月7日(土)　⇒　延　期(延期日未定)
会　　場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
講　　師：梶 原 さい子 氏(「塔短歌会」編集委員)
応募短歌：64首

(2)　初心者のための短歌講座
日　　時：平成31年4月～令和2年2月　毎月第2土曜日
午前10時～ 12時
会　　場：沼津市若山牧水記念館会議室
講　　師：永久保 英 敏 氏
参 加 者：10回開催　延べ188人

(3)　牧水記念館短歌会
日　　時：平成31年4月～令和2年2月　毎月第2土曜日
午後1時30分～3時30分
会　　場：沼津市若山牧水記念館会議室
講　　師：永久保 英 敏 氏
参 加 者：10回開催　延べ84人

(4)　牧水記念館俳句会
日　　時：令和元年5月、9月、令和2年1月　第4日曜日
午後2時～4時30分
会　　場：沼津市若山牧水記念館会議室
講　　師：榎 本 好 宏 氏
参 加 者：3回開催　延べ42人

(5)　書道講座
日　　時：平成31年4月～令和2年3月　毎月第3火曜日　午後1時～3時
会　　場：沼津市若山牧水記念館会議室
講　　師：成 田 真 洞 氏
参 加 者：9回開催　延べ　71人

・平成31年度「書道講座」受講者作品展示
期　　日：令和2年3月17日(火)～3月29日(日)
会　　場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
入 場 者：156人

(6)　第30回「中学生短歌コンクール」募集・表彰
募集期間：令和元年5月1日(水)～令和元年7月31日(水)
応募短歌：1,557首(19校　1,557人)
入選短歌：49首
選　　者：青木朝子、永久保英敏、河本尚子
表　　彰：令和元年10月20日(日)　「沼津牧水祭・碑前祭」にて

(7)　音楽イベント
第1回　古楽コンサートシリーズ39「リコーダー今昔物語」
日　　時：令和元年9月14日(土)午後6時45分
会　　場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
出　　演：武石富士雄、石和美和、青木里砂(リコーダー)、
中村孝昭(チェロ)、杉山佳代(チェンバロ)
来 場 者：79人

第2回　牧水の空間に遊ぶ
「モーツァルト＆ドビュッシー　ピアノと歌曲の夕べ」
～ヴェルクマイスター音律で音を重ねる～
日　　時：令和元年11月3日(日)午後6時30分
会　　場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
出　　演：嘉者熊真弓(ソプラノ)、石川晴恵(ピアノ)、
岡田千香子(メゾソプラノ)、小森俊明(ピアノ)
来 場 者：123人

第3回　古楽コンサートシリーズ40
「フラウト・トラヴェルソ、ヴィオラ・ダ・ガンバ、チェンバロの夕べ」
日　　時：令和2年2月29日(土)　⇒　延　期(延期日未定)
会　　場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
出　　演：青島由佳(フラウト・トラヴェルソ)、
櫻井茂(ヴィオラ・ダ・ガンバ)、
杉山佳代(チェンバロ)

4　その他の事業

(1)　協賛事業
第90期　ヒューリック杯「棋聖戦」第3局
豊島将之棋聖 対 渡辺　明二冠
主催：産経新聞社、公益社団法人日本将棋連盟、日本将棋連盟沼津支部、
第90期 将棋「棋聖戦」第3局開催実行委員会
特別協賛：ヒューリック株式会社
後援：沼津市、沼津市教育委員会、沼津商工会議所、沼津市商工会、
沼津観光協会、沼津倶楽部、沼津牧水会、プロジェクトN
対　局：令和元年6月29日(土)午前9時
会場：沼津倶楽部
前夜祭：令和元年6月28日(金)午後6時
会場：沼津リバーサイドホテル
こども将棋大会：令和元年6月23日(日)午前10時
会場：沼津市若山牧水記念館
指導将棋会：令和元年6月29日(土)午前10時
会場：沼津市若山牧水記念館
大盤解説会：令和元年6月29日(土)午後2時
会場：沼津市若山牧水記念館、沼津倶楽部
参加者数：前夜祭320人、大盤解説会199人、指導将棋会35人、
こども将棋大会　66人

公益社団法人沼津牧水会定款（抜粋）

第一条　この法人は、公益社団法人沼津牧水会と称する。
第二条　この法人は、主たる事務所を静岡県沼津市千本郷林一九〇七番地の一一に置く。
第三条　この法人は、歌人若山牧水を顕彰し、文学的業績の研究を深め、短詩型文学の普及を図り、もって、教育文化の振興に寄与することを目的とする。
第四条　この法人は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。
(1) 歌人若山牧水に関する調査研究
(2) 沼津牧水祭（短歌大会及び碑前祭）の運営
(3) 文学講演会、文学講座等の開催
(4) 文学に関する各種出版物の刊行
(5) 沼津市若山牧水記念館の管理運営の受託
(6) その他この法人の目的を達成するために必要な事業
第五条　この法人に次の会員を置く。
(1) 正会員　この法人の目的に賛同して入会した個人又は団体
(2) 賛助会員　この法人の事業を援助する個人又は団体
(3) 名誉会員　この法人に特に功労のあった者で、会員総会の決議をもって推薦されたもの
2　前項の会員をもって、一般社団法人及び一般財団法人に関する法律上の社員とする。
第六条　この法人の会員になろうとするものは、入会申込書を理事長に提出し、理事会の承認を受けなければならない。ただし、名誉会員に推薦された者は、入会の手続を要せず、本人の承諾をもって会員となるものとする。
第七条　この法人の事業活動に経常的に生じる費用に充てるため、会員になった時及び毎年、会員は、会員総会において別に定める額を支払う義務を負う。

公益社団法人沼津牧水会入会金及び会費規程

第一条　この規程は、公益社団法人沼津牧水会定款第七条に基づき、入会金及び会費について定めることを目的とする。
第二条　定款第七条第一項に規定する入会金は、次のとおりとする。
(1) 正会員　一〇、〇〇〇円
(2) 賛助会員　三〇、〇〇〇円以上
第三条　定款第七条第一項に規定する会費は、次のとおりとする。
(1) 正会員　五、〇〇〇円（年額）
(2) 賛助会員　一〇、〇〇〇円以上（年額）

〈理事長〉林　茂樹　〈副理事長〉浅井　治　保坂　輝夫
〈理事〉田中　和男　金子　安夫　四方　一弥　長澤　靖夫　青木　朝子
河辺龍二郎　永久保英敏　河本　尚子　飛澤浩四郎
〈監事〉鈴木　弘行　栗原　進
〈事務局〉大島　葉子　伊藤早智子　納谷　瑞穂　市川　悦子

編集後記

お祝いムードが日本中を包んでスタートした令和元年。早々の五月に「桜を見る会の問題」が明るみに出て、「もり・かけ」の問題と共に不透明なまま令和二年が始まりました。直後に、新型コロナウィルスによる感染症が発生し、拡大しつづけております。当初は短期間で終息するかと思われましたが、未だに終息いたしません。

この影響で、当会主催の「コンサート」と「雛の歌会」も延期することになってしまいました。新型コロナウィルスの被害に遭われた皆さまに心からお見舞いを申し上げるとともに、一日も早い終息をねがってやみません。

巻頭に、榎本篁子館長の「明治から令和へ」を載せました。牧水が明治四十三年に創刊した「創作」が、令和元年九月に終刊となりました。牧水の孫として、また、「創作」の編集に当たられた方として、「百巻記念号」と「終刊号」の内容を紹介されつつ、「創作」への思いを綴られました。

「沼津牧水祭」の「短歌大会」は、穂村弘先生を講師としてお迎えして充実した歌会を催すことができ、「碑前祭・芝酒盛」も、多くの方々にご参加いただき盛大に開催できました。

「短歌講座・短歌会」「俳句会」「書道講座」及び「サロン音楽の夕べ」も好評でした。

昨年で七回目となった将棋「棋聖戦」第三局が沼津倶楽部で開催されました。大盤解説会・こども将棋大会・指導将棋会が当記念館で催され、沼津リバーサイドホテルでの前夜祭にも大勢の参加者がありました。

本年度も変わらぬご支援をお願い申し上げます。

■会報「幾山河」第33号 ■令和２年５月15日発行 ■編集・発行 公益社団法人沼津牧水会 ■〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11
TEL・FAX〈055〉962-0424　E-mail：bokusui@thn.ne.jp　URL：http://web.thn.jp/bokusui/　■印刷 ㈱耕文社